



砂茶碗（タマガイの仲間と思われる貝類の卵のう）

砂茶碗の大きさ：直径 4cm~5cm ほど。

泡瀬地区の砂干潟の上を歩いていると、あちらこちらに奇妙な形をした砂のオブジェが観察できる。これは、まるで造形作家が作製したとも思われるほど、精巧な形であるが、実を言うと、貝類が作ったものである。貝といっても、タマガイという仲間の巻貝である。

タマガイの仲間は、砂粒と粘液をこねてつくった独特の形の卵のう（通称：砂茶碗、写真右側）を産む。泡瀬地区の干潟には、この砂茶碗が多く観察できる。

タマガイの仲間は、他の貝（二枚貝など）に穴をうがって、中身を食べる肉食性貝類でもある。つまり、タマガイがすむということは、このタマガイの餌となる種々の貝類も周辺にすんでいることを表す。どのような状態で産卵すると、この奇妙な形になるのか、不思議である。